



古代の美について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 栗原, 薫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00001681

古 代 の 美 に つ い て

栗 原 薫

北海道教育大学旭川分校歴史研究室

Kaoru KRIHARA: On the Beauty of Ancient Japan

1

古代は貴族の時代であり、美の時代であった。我々国芸術の最高のものが此の時姿を現し、以後の指針となった。

その様な古代の美とは何んであろうか。

私は古代人は美をなんと考えたのであろうかと言う所から考えて行きたい。

古代人は美なることをうつくし、うるはし、にほふなどと言った。

うつくしが初めて古典に現れるのは、日本書紀の孝徳天皇の巻で、それにつぐのが同書の斉明天皇の巻である。孝徳天皇の巻のは、中大兄皇子妃造媛の死をいたむ歌、斉明天皇の巻のは、斉明天皇の御孫で、造媛の子の建王の死をいたむ天皇の御歌の中に使われている。

・造媛は、大化の改新に中大兄皇子、藤原鎌足と共に功をたてた蘇我の倉山田麻呂の娘であった。

蘇我の倉山田麻呂は蘇我馬子の孫で、蝦夷のおい、入鹿の従弟である。蝦夷の弟の蘇我倉麻呂の子で、蘇我臣赤兄、蘇我臣日向、石川朝臣連子の兄弟であった。子に乳娘、造媛、興志等がいた。

皇極天皇が即位されて二年目の正月、中大兄皇子と藤原鎌足は大化改新の計画を打ちあけ合い手はじめに蘇我倉山田麻呂を仲間に引入れようとした。その為麻呂の長女を中大兄皇子の妃にするはこびになった。所がその長女を異母弟の蘇我臣日向がよこどりしてしまった。そこで麻呂が恐れ憂いていると、妹の造媛が代りに妃になりたいと申し出た。そこで彼女が妃となった。

姉の乳媛は孝徳天皇の妃となった。

蘇我氏が亡された後、クーデターの中心人物であった中大兄皇子は即位されず、孝徳天皇が皇位につき給うた。天皇の下に大化の改新は進められたが、三年たった三月、さきに麻呂の長女を奪った蘇我臣日向が、今度は中大兄皇子に麻呂を讒言して、皇太子中大兄皇子を暗殺しようとしていると言った。中大兄皇子は讒言を信じ、麻呂の家を囲ましめられた。当時都は難波であったが、麻呂は大和の飛鳥に程近い山田に逃げた。そこでは彼は山田寺を造営中であった。倉山田の山田はこの地名より出ているので、恐らく彼の本拠があったのであろう。子の興志が防戦したいと言ったが許さず、妻子と共に自殺した。

彼の死後、中大兄皇子は麻呂の財産を収容された。すると好い本、大事な宝には中大兄皇子のものと書いてあった。皇子はその話を聞いて、麻呂が直接お会して疑をときたいと言ったのに、まのあたりの申しひらきを許さず、自殺へおい込んで行かれたが、実は悪い心はなかったのだと

きづいてなげかれた。

造媛は父が不幸な死に方をしたので、つねになげいて居られたが、三、四年してなくなってしまわれた。

中大兄皇子ははなげき悲しみ声をあげて泣かれた。

その時、野中川原史満が、中大兄皇子の御気持をしのんで、歌を作ってたてまつった。

その歌は

「山川に、をし二つ居て、比ひよく、たぐへる妹を、誰かゝにけむ（その一）もと毎に、花は咲けども、なにとかも、うつくし妹が、又咲きて来ぬ（その二）」である。

中大兄皇子は、なげきはめて、善しきかな、悲しきかなといい、御琴をさづけて唱わしめ、又絹四疋、布二十端、綿二かますを賜った。

広い天地に、夫婦のおしどりが二羽丈いて、仲よく並んでいる姿がまぶたに浮んでくるが、その一羽にも似た私の妻を、誰がつれて行ったのであろう。（その一）

どの草木も、冬は葉が落るなどして、枯れた様だが、春になると一もと毎に花が咲く、今はその春だが、死んだ美しい妻は、なぜにもう一度よみがえってきて花の咲く様に、あでやかに笑いさざめいてくれないのであろう。（その二）という位の意味であらう。

作者の野中川原史の野中は、今大阪府にあり、その野中寺には、飛鳥時代の小さく美しい弥勒がある。野中は平安時代に出来た我々国最初の百科辞典の和名抄にでている郷名である。

中大兄皇子と造媛との間に、一男二女があり、第二女は後の持統天皇である。一男は建皇子で斉明天皇の四年なくなられた時八才であったから、日本書紀による誕生の年は孝徳天皇の白雉二年、つまり倉山田麻呂が死んで三年目である。この年迄造媛は生きて居られた事にならう。又造媛の妹と天智天皇との間に、天武天皇の皇太子草壁親王の妃、後の元明天皇が生まれた。

本朝皇胤紹運録に持統天皇は、孝徳元（年）降誕としてある。大宝二年崩じ給いて年五十八才。年を逆算しても孝徳天皇元年大化元年になる。日本書紀の天智天皇の巻、持統天皇の巻などに、造媛の第二女とあり、天武天皇の御巻に、太田皇女を持統天皇と姉として居る。造媛と中大兄皇子との御結婚は皇極天皇の三年で、孝徳天皇の元年の前年なので、太田皇女は皇極天皇三年の誕生になる。

建王はこの二人の皇女の弟で、孝徳天皇の白雉二年の誕生である。その時太田皇女は九才、持統天皇は八才であり、建王が八才で死んだ時、太田皇女は十六才、持統天皇は十五才であった。造媛はその間建王が生まれて間もなく、なくなれたものと思われる。

建王は啞で口が聞けないのを、祖母の斉明天皇が大事にされた。建王がなくなれると、非常にかなしみなげき賜うた。そして群臣に、朕が死んだら、朕の陵に合葬せよといいつけ給うた。

それから三年たって太田皇女が天武天皇との間に第一子大伯皇女を、翌年、同じく持統天皇が同じく天武天皇との間と草壁皇子を生んで居られるので、それ迄に天武天皇の妃になられたのである。

斉明天皇は太田皇女の生まれた皇女に自ら大伯と名を付けられたが、持統天皇に皇子が生まれる前に崩御されて、天智天皇の御代になった。

天智天皇の六年二月、斉明天皇の陵、小市岡上陵が作られ、太田皇女がその陵前の墓に葬られた。

太田皇女はその前になくなっていたのである。二十五才以前である。

造媛の生んだ御子の中若くて死んだ二人が、合葬又は陵前の墓に葬られているので、斉明天皇

は造媛が後にのこした御子に特別愛情をそそぎ、恐らく手もとに置いておかれたのではあるまいかとも思う。

非劇的な運命を負うておられた造媛とその遺子に同情の心を格別に持たれた事であろう。

斉明天皇は建王を葬って歌三首作られたが、五ヶ月してその年の冬十月の、十五日に紀州白浜の温泉に御出になった。天皇はそこで建王を思い出し、なげき悲しみ給い、歌三首作って歌われ、秦大蔵造万里に、この歌を伝えて、決して忘れさしてはならないと命じ給うた。

その歌は次の様であった。

「山越えて、海渡るとも、おもしろき、いまきのうちは、わすらゆまじに（その一）みなとの潮の下り、海下り、後も暗に、おきてか行かむ（その二）うつくしき、わかきこを、おきてかゆかむ（その三）」

その意味は次の如くであろう。

都の飛鳥より生駒山脈をこえて、更に大阪湾を海路をへて紀州迄きたが、更に山をこえ、海を渡り、先へ先へ行っても、建王を仮に葬って祭った今城谷で、青白い顔付をして悲んでいたのを忘れる事はできまい。（その一）ここから紀州の港が見えるが、引き潮が引いている、その潮にのって、夕方紀州を舟出し（西へ行くと後の空が暗い様に、暗い思いを後に残しながら、建王を後にすてて行く事が出来ましょか（その二）美しい私の若い子を、すてて行く事が出来ましょか。（その三）。

ここに面白いのは、青白い顔という意味であるが、後興味深いという意味に変わった。書紀神武の巻に、倒き語という事があり、妖気を掃うのに用いられると書いてあるが、その様な使い方が固定したのででもあろうか。ただこの所では青白いの意である。

この歌は斉明天皇が特に後にのこす様に命ぜられた歌であるし、命ぜられた斉明天皇は三年後になくなられたが、斉明天皇の孫で建王の同母の持統天皇はその後四十年生きて居られ、又斉明天皇の御子天智、天武二天皇はその後三十年生きて居られ、特に天智天皇は建王の父帝であるから、この御製はしばしば宮廷で思い出され歌われた事であろう。又それをめぐる事情も回想された事であろう。造媛の歌も、一しょに回想され歌れた事であろう。

これらの歌が、日本書紀にとり入れた事はかなり自然である。

かつ正確に事実を伝えていると思う。

もっとも記録として残っているものには日付は明記してない所が多かったので、書紀の所々に手頃に入れてある。

この二つの歌は万葉仮名で書かれているので いづれもうつくし(き)とよむのは間違いない。造媛のは于都俱之、建王のは于都俱之枳とかかかれている。

同様万葉仮名でうつくしと書かれたものが、奈良以前の古典の中に、万葉集と播磨国風土記の中に見られる。

万葉集巻二十 四三九二番の歌に

下総国埴生郡大伴部麻與佐の作で

天地の いづれのかみを ^{アメツツシ}いのらばか うつくし母に また言問はむ

同巻二十 四四一四番の歌に

武蔵国秩父郡大伴部小歳と言う助丁の作で、大君の 命かしこみ うつくしけ ^{マコ}愛子が手離り ^{ヘサ}島伝ひ行く

同巻二十 四四二二番の歌に 同国都築郡の上丁服部於田の妻、服部些女の作で

古 代 の 美 に つ い て

わが背子を 筑紫へやりて うつくしみ 帯はとかなな あやにかも寝も

(私の夫を、九州の防人の雑用奉仕に出して、うつくしみ、帯をとかず、心みだれてゐる事である。)

同卷二十 四四二八 昔年防人の歌に

わが背なを 筑紫はやりて うつくしみ えひ(帯)はとかなな あやにかも寝む(前の歌と同じ意味である、背なは夫、筑紫は筑紫へである。)

同卷十四 三四九六

橘の こぼのはなり(放髪少女)が 思ふなむ 心うつくし いで吾は行かな

(武蔵国橘樹郡のこぼの少女が私を思っているだろう、その心がうつくしい、さあ私は出かけるぞ。)

同卷五 八〇〇

惑へる心を返さしむる歌一首に、 父母を見れば尊し 妻子見れば めぐしうつくし 世の中は云々

播磨国風土記の賀毛郡、小目野の所に、品太天皇が、小目野に来て四方を見給うのに、霧がかり良く見えないので、大体は分るが、小目なきかまとのたもうたので小目野と言うのだとありそこでよまれた御歌がのっている。

うつくしき 小目の笹葉に あられふり 霜ふるとも な枯れそね 小目の笹葉

これらの例を考えて見るのに、播磨国風土記のは自然物の形容であるが、他は人と人との間がらを説明したものである。

男女の愛が四、祖母や父の子に対するものが夫々一、子の母に対するものが一、夫、父親が妻に対するもの一である。心が引かれて忘れられないと解して皆意味が通る。

それが奇麗なのでもある。

平安時代に少し入ってであるが、新撰字鏡に娃 美女良 宇豆久志支乎美奈 と記されているのは、美は宇豆久志にあたり、宇豆久志が美、奇麗にあたる事を示している。

次の美という言葉のうるはしについて考えて見たい。

うるはしは憂はしが憂ふの形容詞である如く、うるむの形容詞である。

播磨国風土記^{シサハノコホリウツカノサト}宋末郡雲箇里に大神之妻、許乃波奈佐久夜比賣命、其形美麗、故曰宇留加とある。

此は兵庫県の西部、揖保川が三方川と引原川に分れるあたりの説話である。大神は此の地方の話にしばしば出てくる伊和大神である。

許乃波奈佐久夜比賣は記紀の説話では、石長比賣と姉妹で、大山津見神の娘である。二人ともに邇々芸能命の妻として送られたが、石長比賣がみにくいので石長比賣のみ帰された話がある。

此所では石長でなく伊和であり、男であるが似た取り合せである。

この宇留加の加は有処(ありか)のかであって 然る所の意であるから、宇留(うる)が美しい意である。

つまりうるふさまが美しいのである。

川端康成氏がノーベル賞をもらって受賞式にストックホルムに行った時の講演で、我ケ国の文学がうるほひの文学である事をのべられたが、私は美しいという言葉もうるほふさまをさしているのだと付け加えたい。

更に付け加ふべきは、原色をさす言葉が上代古典にあり、くれないとして出ているが(あか、になどと他の言い方もある)、これはあいは間であっても中間色の意であり、原色と反対の言い方

である事を言いたい。

これは原色はあらかたどの色にもふくまれて居り、又夫々の色を繋ぎ、取持つ色なので、間の色と思われたのである。

相模河を鮎川というのは、間川で、相模国の中央を流れる川だからである。

くれないにはたぶん黄もふくまれているのである。

日本晴という言い方もあったが、春は霞、秋は霧とかすむ様がむしろ喜ばれた。事実日本の様に湿気の多い所では、湿気が自然な色どりに変化を与え、殊に朝夕は赤く黄色く様々になって、或る時は美しく、或る時はおごそかに、すてがたい喜びをあたえてくれる。この方がかえって日本的なのだが、日本晴は気候のよい頃の雲一つない晴天に与えられた名である。たまにあると格別美しいと言う事もあるが、実は割合と少い天候である。

その様なうるむ景色がうるはしいのである。

後述倭建命の思国歌によまれたうるはしは或はその様なものかもしれぬが、上代の古典に現れたうるはしは自然を表したのは、思国歌のみで、他の十程の用例は皆人間関係を表した言葉であって、うるはしの語源はうるふであるが、自然のかすむ、うるふ様をめでて言ったというより人間関係のうるんだ様を表現したのである。

鉢植に水をやると水けをおびて生々として来、春となり雨が多く降ようになると、草木が水けをおびて生々としてくる（太平洋岸、瀬戸内では冬極端に雨が少い）様に、人間も生々としてゐる時はうるんで見え、情愛が高まると心がうるむのである。それが美しいのである。

古事記中巻に、^{オホナヅメ} 応神天皇が、九州の日向国の諸県（宮崎県南部）君の娘の髪長比賣を召し給うた所、皇子の大雀命、後の仁徳天皇が愛情を感じ、応神天皇よりいただいて、歌はれた歌

道の後、こはだ乙女を 神の如 聞えしかども 相枕まく

道の後 こはだ乙女は 争はず 寝しををしども うるはしみ思ふ。

（西へゆく道の最はての国の、こはだ乙女は、おとなしく寝たのを、うるはしく思う）

次に同じく古事記下巻允恭天皇の御代、木梨之輕太子が同母妹輕太郎女にたはけて、歌われた夷振の上歌に

笹葉に 打つや霰の たしだしに め寝てむ後は 人は離ゆとも うるはしと さ寝てし寝てば 刈薦の乱れば乱れ さ寝しさ寝てば

（たしだしは霰の笹葉を打つ音をまねかつ確かにと言う意味を表している。め寝はつれてねる事、刈薦は乱の枕言葉）

この二組の説話は、日本書紀にも出ている。歌も大雀命の方のはほぼ同じなのが出ている。古事記では、こはだ乙女は、ねしくをしども うるはしみおもふとあるのが、書紀では、こはだ乙女 ねしくをしぞ うるはしみもふ になっている丈である。輕太子のは歌は無い。

次に万葉集巻十五に、流罪になった中臣朝臣宅守と、その愛人の狭野弟上娘子との贈答歌六三首の中の三首がある。

三七二九 うるはしと 吾が思う妹を 思ひつつ 行けばかもとな 行きあしかるらむ（もとなは不安あるの意）

三七五五 うるはしと 吾が^も思う妹を 中に^へ隔りて 安けくも無し

三七六六 うるはしと 思ひし思はば 下^へひもに 結ひつけ持ちて 止まず偲ばせ

（此は形見の品をうたったのである）

此等は皆宅守の歌である。

古 代 の 美 に つ い て

此等は皆男の愛人や妻に対する歌であり、かわいいと言った風の言葉であり、うるほひのあるうるほった心を示して居る。それは又美しいのである。

更に大伴旅人の歌一首及び大伴家持をめぐり四首の歌がある。

万葉集巻五 八 一一 は、大伴旅人が九州から藤原房前におくった大伴淡等謹状 梧桐日本琴一面 対馬結石山孫枝此琴云々の中の一首都房前の返事がつづいてのせられている。天平元年の事である。

言問はぬ 木にはありとも うるはしき 君が手馴れの 琴にあるべし

(対馬産の木で作った琴の霊が、夜夢に出てきて、音楽のわかる人のものになりたいと言い、かつ歌ったので、この歌を作って答えたら、琴の娘は喜んで、幸甚々々と言ったと見て夢がさめた。そこでその琴を藤原房前に贈った。

歌は物を言わぬ木であっても、うるはしい方が、いつも身近に置いて弾く琴になるだろうと言う意味である。)

万葉集巻十七 三九七四 は、天平十九年二月五日越中掾大伴宿弥池主が、越中国で、家持に贈った文の中の一首都である。

山吹は 日は日に咲きぬ うるはしき 吾が思ふ君は しくしく思ほゆ

(しくしくはしきりにの意)

万葉集巻十八 四〇八八 天平感宝元年五月九日、越中守家持が、少目秦伊美吉石竹の館に集って、宴会をした。時に主人が百合の花かずら三枝をつくり、豆器^{ヅキ}にかさね置いて、皆がこのかずらを歌った三首の中の一つで、家持の歌である。

小百合花 ゆりもあはむと 思へばこそ 今のまさかも うるはしみすれ

(将来も会おうと思うからこそ、この現在もうるはしくするのだ)

万葉巻二十 四四五一 天平勝宝七年五月十八日、左大臣橘諸兄が、子の兵部卿橘奈良麿朝臣の宅で宴した時の歌三首の中の一首都、皆なでしこを詠んでいて、治部卿船王の歌一首につづいてよんだ家持の歌二首の終りの歌である。

奈良麿をなでしこになぞへている。

うるはしみ 我が思ふ君は なでしこが 花になぞへて 見れどあかぬかも

万葉集巻二十 四五〇四 天平宝字二年二月、式部大輔中臣清麿朝臣の宅に宴して歌った歌十首の中の一つで、主人中臣清麿朝臣のである。

うるはしと 我が思う君は いやひけに 来ませ我が背子 断ゆる日なしに

(うるはしいと思ふ貴方は、日ごとにおいで下さい。絶える日も無しに)

此等五首の歌は、宴会の席で出席している人を形容し、或は友情を形容し、又贈答の歌で相手を形容してよまれている。巻五のは、形式の上では第三者だが実は贈答の相手を形容している。

その中、小百合花の歌のは、うるんださま、しっとりと親しむのだ、なかよく親しむののだの意であろう。巻の五のは、愛深き、他は友情深き位で意が通じるのではあるまいか。

次に常陸国風土記に行方郡芸都里の宇流波斯の小野は倭武天皇が国栖の寸津毗賣の奉仕をよろこび恵慈し給うたので名付けられたとある。このうるはしは心がうるおいめぐむ心が厚い様を言っている。

最後の一つが、古事記中巻の倭建命の恩国歌である。

倭建命は東国征伐の帰り道、大和への間近い伊勢の能煩野なくなられたが、その前思国歌と片歌をお作りとなった。

大和は 国のまほろば たたなづく 青垣 山ごもれる 大和しうるはし
命の 全けむ人は たたみこも 平群の山の 熊かしが葉を うづにさせ その子
はしけやし 我ぎ家の方よ 雲居立ちくも である。

この御歌は、日本書紀では、景行天皇が日向国（宮崎県）子湯県の丹裳小野の野中の大石におのぼりになって京都をしのんで歌われた歌になっている。

はしきよし わぎ家の方ゆ 雲居たちくも
大和は 国のまほらば たたなづく 青垣山 こもれる 大和しうるはし
命のまたけむ……………で大体同じである、

双方その由来を異にするも、万里遠征の兵士等によって歌われたのであろう。

この歌のみは自然をさして、他の例と異なる。しかしこれは心のうるむ国だとの意で、思えば涙が出てくる程なつかしい国だという意味にとれる。

しかし又美しいのでもある。

つまり他の例と同じであるが対象が自然なのである。

此等を見てくると、うるはしの方も人間の情愛の美しさから自然への愛着、美しさへと意味が広がったものかと思える。ともかくも愛情より出ている事はうつくしと変りは無いと思う。

（時代別国語大辞典上代篇が、自然の美が元来な意味で、愛情をさすうつくしと区別されているとしているのは、うるはしの自然をさす例が一つしか無いに対して、愛情をさすのが十例もあって少し工合が悪いと思う。岩波古典文学体系の補註は、類従名義抄によって、端麗など外面に出た美がうるはしで、内面の情のうつくしと異としているが、うるはしが、うるむより出ていると思われる点、又各例とも内面の情と結んでも解釈しうる点、名義抄は平安時代に入りかなりしてから著述であり、それまでに語義の変化がありうる事などから、必ずしも当らぬと思う。）

うつくし、うるはし皆愛情が美しいと言う意味の言葉である。この愛情から美を発見したと言う事が、日本の美術を非常に特色づけていると思う。

岡倉天心の日本美術史に、日本美術の特色の一つに優美な点を挙げている。

そして我が美術の大体は優美の性質を有し、藤原氏の時は全然外国の羈絆を脱した為に、純乎たるその天真を発揮して、優美の極に達したのである。即ち、日本人を放任して、自然の発達を妨げる事が無い時は、必然この点に帰着するであろう。東山時代も、支那に比すれば優美である。その理由は血統の為か、自然の秀麗に感化されるのか、まだ分らぬが、優美の性質を具備しているとしている。私はかかる優美の原因は、日本人がまず愛情に美を発見し、それを芸術化しようとした為だろうと思う。

はにわのは素朴ながら優美なのが多いが、それは人を愛する表情である。それは又くまのない姿なのである。それは端正というべきものがあるとしても、猶慈愛の光にあふれている。

それは前代縄文土器の時代にはなかったものである。

又高句麗をまねたと思われる六世紀の北九州の装飾古墳の壁画や石人も、地方的な異物としか思えぬ。さればこそ大和を始め他の国土に広がらなかったのであり、又かかる古墳の一つを自身自身の為に自ら造営した筑紫国造磐井は反乱を起して殺されたのである。

北魏に西方の仏像製作が伝って来て 盛大に花ひらくと、やがて日本へ伝って次第に根を下ろす事となった。今残る百程の飛鳥仏は、その様式は北魏仏に似ているが、その表情は必ずしも似ていない。

それは中宮寺の弥勒などに見られるものである。其は少女の姿であるが、くまの無い愛情が特

古代の美について

色である。くまはいやしさ、ごう慢さ、媚びなどである。北魏仏にはぬぐいがたくあり、飛鳥大仏を始め飛鳥仏にもかなりある。メキシコの美術には、それがかえって強調されているものがある。

飛鳥仏では、すぐれたものに見られたかか特色が、白鳳時代には時代の特色になる。中宮寺の弥勒がすでに少女であるが、この期は童児形でくまのない愛情が表される事となった。それは優美ともいえた。

法隆寺金堂天蓋の楽人達などである。

それはすでに埴輪に表現されたうつくし、うるはしが北魏仏を消化して、日本的に表現されたものである。

久野健氏は日本の彫刻で、白鳳時代の童児形を指摘し、顔つきも、体つきも童児のそれに似たあどけない作風の遺品が多いのである。とすると共に、唐の仏像にはその例が無いが、恐らく大陸からの影響だろうとされているが、私はむしろ日本化の姿だと思う。杏仁形の目が、平安期の絵画の引目に似た細い目になって後につづくのも日本化の現れである。これははにわにも見られる。

岡倉天心氏は法隆寺壁画に見られる西域 更にその西よりの影響を重視して天智天皇時代を奈良天平時代と推古飛鳥時代の中に入れられたが、又日本化という点で別の特色も出していたとすべきである。

最初にのべた造媛、建王の甲歌はかかる時期のものである。

この母子の、殊に建王の事は斉明天皇の特別の御思召もあった事だし、姉の持統天皇など身辺の人が長く後に残って宮廷を動かしてこられた事から、しばしば人々の念頭に浮んできた事であろう。その甲歌によまれた亡き人のうつくしさが、殊に八才で死んだ建王の童形がうつくしいものとして、仏像の姿に表現される事があったのではあるまいか。すでに飛鳥期に姿を見せ始めた日本的な表現としての優美さが、童形として一般化したのが、其れは「うつくしき、わかきこ」であった。

この時代の仏像に山田寺の仏頭がある。

上宮法王帝説裏書には、聖徳太子と直接関係の無い注が若干付いている。それは蘇我倉山田石川麻呂関係である。なぜ付いているのであろうか。その一つに、山田寺についての記事がある。それによると舒明天皇崩御年西暦六四一年地をならし、皇極天皇二年六四三年金堂を建て、大化四年六四八年僧が住みはじめ、翌六四九年三月二十五日倉山田麿が死に、天智天皇二年六六三年に塔を作り始め、天武天皇白鳳元年六七三年、塔の心柱をたて、天武天皇四年六七六年露盤をあげ、天武天皇六年六七八年丈六仏をいはじめ、天武天皇十三年六八五年三月二十五日に開眼した。倉山田麿が死んだ後、彼の忠節が分り、寺は存続し繁栄した。

久野氏の日本の彫刻によると、この丈六仏は鎌倉時代に興福寺東金堂に移され、後火災にあった首のみ残ったが、昭和十三年偶然、東堂の台坐の下から発見された。これが山田寺の仏頭である。

(玉葉によると、文治三年九月、藤原兼実が興福寺より東金堂の最下層の僧たる堂衆が、別当や、学問をする衆僧、長吏に無断で、勝手に山田寺の丈六薬師を奪い取って東金堂の本尊にしようとしたと報告を受け、早速返す様に命じた。

丁度七年前治承四年、興福寺は平家に焼かれて金堂等を造営中であった。そこで本尊を分捕ってくる必要があったのである。

文治五年八月二十二日、兼実は南都奈良に赴き、興福・東大二寺の工事を巡検した。その時、興福寺東金堂にその仏が返されずに安置されているのを実際に見ている。それは頼朝が平泉に入った日であった。）

この仏頭は、久野氏は唇には微笑をたたえ、おさない顔付につくられている。この表情の明るさは上昇期にある天武朝の社会を反映しているのであろうとして居られる。

当時、大君の命かしこみ、千里を遠しとせず、遠の朝廷と旅だっていった「ますらを」の姿を残しているのであろうか、又おさなさと云って良い様な所がある。一つは表情であるが一つは頭が一米以上あり、丈六仏の頭とすると幼児の大きさだと言う点にもある。そのおさなさは、心にくまがなく、つまりこびや、ごう慢さや、いやしき、ずるさが無い心からきている。純粹に天皇にお仕えするのを喜びとした心から出ている。それは又一種の愛情なのである。くもりのない愛情であって、それは男女、肉親の愛、或いは児童のすなおな愛情と同じものであり、それは自然におさないのである。どこか幼児の貴さに似た所がある。かかるものが作られたのは時代精神の反映でもあるが、又日本的な特色がよりよく反応したものでもある。この像或は倉山田麿を写したものだとするれば、猶造媛、建王と関連深くなり、彼等の形容であるうつくしくと結びつく事となる。

法隆寺の橘夫人念持仏も当代のものである。

橘夫人は、敏達天皇の子孫美努王と結婚し、後藤原不比等と再婚し、天武、持統、文武、元明天皇に御仕えし、橘諸兄、光明皇后の母であり、宮廷で隠然勢力を持った人として有名である。

彼女も天武以下の宮廷に仕えたのであるから、造媛の娘で建王の姉の、さきには天武皇后であられた持統天皇を中心に、恐らくは建王や造媛を追憶する宮廷の空気の中に暮していた事であろう。

念持仏は日常そばに置いて拝む仏であるが、その仏は今は法隆寺にある。

女人の姿をうつした像であるが、やはり頭が大きく童子の頭でもある。此仏像にもくまの無い美しさがでている。

（オリンピック記念日本古美術展出品の法隆寺の観音、勢至立像についての東京国立博物館の解説に、「六観音のうちの二軀で、童形、童顔の姿に特徴があり、飛鳥奈良時代の交、日本の感覚を反映して作られた様式と思われる。」とある。）

白鳳時代は北魏仏が我が国に定着、伝統的な様式を表わし始めたのであったが、天平時代にいたるや、次々に流れ入る西方の文物の影が深く、伝統はやや姿をうすめる事となった。

さはいえ、天平の文物、当時の日本の時代精神の具体に外ならない。正倉院の御物、広く世界の物を容れつつ猶日本的である事、終戦後或る支那人が言っていたと、東伏見慈治先生が京大の講義で言って居られた。

当時、論理の重んぜられ、合理的なるものが強くでた時代であって、それ丈に感覚的なものが強くでた時代であって、それ丈に感覚的なものには大まかであり、日本的と必ずしも言えぬ様なものでもさして気にはならず、むしろ世界に共通したという抽象性を喜んだのであった。しかしなお独自性をもっていたのは、我々国が自主の国だったからである。

当時は、色彩についても、平安時代の様に複雑なセンスは発達していなかった。平安時代には二つの色彩の布をかさねて、新しい色を出すなど色への関心、工夫が行われ、色の名も無数にできた。それは湿気にめぐまれ、刻々複雑な色彩に変る日本の風土にふさわしい事であった。

しかし奈良時代或はそれ以前には、色についての名が非常に少い。黒、赤、青、白位である。

古代の美について

これは色彩についての関心が少なかった為に外ならない。

もっとも前に述べた様に、赤や青かあいの色、つまり万物のいろどりの中にふくまれている事に気付いていたのはさすがであって、我民族の資質の一つを示している。

奈良時代は赤の色がこのまれ、奈良の都は、紅のしみついている様だと万葉集に歌われている。又天平時代の絵画、六枚の鳥毛立女屏風絵（樹下美人図）や、薬師寺の吉祥天女図には赤が効果的に使われている。

京都蓮台寺の絵因果経は釈迦の前世の物語と 仏伝とを説いた経で経文を書き上段にそれに相応する絵を書いたものであるが単純な色どりの素朴な絵である。

しかし猶当代は色彩感も単純であって、此はうるはしはうるむより出ているといいながら、それは心がうるむ事で、自然のうるんで美しいさまではないと言う事にもつながってくる。山のうるみの美しさが分れば色彩感も豊になっている筈である。

センスという面ではさして敏感でなかった天平時期には、日本的な美の伝統もはっきりとしなかったが、時代が下って藤原期になると、今度はセンスが細やかになり、もはや異朝風のもので満足できなくなった。ここに国風文化が花ひらく事となった。それは文学に於いてみるべきものがあつたが、美術に於いてもはっきりした特長が出た。

久野氏の日本の彫刻では、表情は、あくまで温和になり、やがて十一世紀に出現した定朝により、全く和様仏像が完成し、この定朝様は日本全国に行なわれる様になったとしている。

この時代の仏像は、西田直二先生が慈眼視衆生の姿だと言われたが、慈愛にとんだ優しい表情はこの期のどの仏像にも出ていて、見るとすぐ分る。

九州観世音寺の宝物殿には、十程の藤原期の仏像があるが、馬頭観音でさえやさしい表情である。

宇治平等院の阿弥陀如来の姿もやさしいが、その背後の飛天の姿もやさしい。

かかる仏像は衆生への愛情の表現に外ならない。一切の衆生を救う愛である。それは白鳳仏がもっと純粹に姿を現したのであつた。もっともセンスが鋭くなった時にやさしさという特色が出たのは、そのやさしさ、優美さが日本美術の特色である事を示している。白鳳仏は異国の仏像が伝つて来た。その初期の異物感を克服しようとした努力が生んだものであつたろう。そこにあつたのも一つの優美さであつたろう。それは愛のにじみでたものであつた。それは愛を意味するうるはし、うつくしが美を現す言葉である事からも説明できる。

優美なうつくしはそれ以後も日本美術の特長であつた。そして今に至っているが、戦後は汚いもの、異様なものに美を見ようとする風が興り、伝統にそむいている。それはインディアン、現代メキシコの美術などに極端に出ているものである。

もっとも、汚いもの異様なものに美を見ようとするのは、古来我ケ国で「にほふ」美としてとらえられている美にひかれているのだとも言える。

2

奈良時代及びそれ以前のうるはし、うつくしという言葉は美麗と言う意味と共に愛すべきだと言う意味を持って居り、我ケ国の美の意識が愛情と結ばれて発達した事を物語っている。

かかる事を先にのべたのであるが、次いで奈良時代ににほふと言う言葉も美しいと言う意味をもっていた事を指摘し、異った美のとらえ方もあつた事、それは我ケ国の美術上主流とはならなかったが、対抗する力として時々姿を現した傾向を支えるものであつた事を述べたい。

にはふには次の用例がある。

1 万葉集卷一 天智天皇が蒲生野に御狩し給ふた時、額田王の御歌に、後の天武天皇が答え給った御歌

紫草の にはへる妹を にくくあらば 人づまゆゑに われこひめやも (21)

2 持統太上天皇が、難波宮に幸し給うた時の、清江（住吉）娘子が長皇子に奉った歌

草枕 旅行く君と 知らませば 岸の埴生に にははさましを (69)

(岸の赤土で布を染めてさし上げたのに)

3 大宝二年 持統太上天皇が三河国に幸し給うた時の、長忌寸奥麿の歌

引馬野に にはふ榛原^{ハシリハラ} 入り乱れ 衣にほはせ 旅の臉^{シムシ}に (57)

(衣をおそめなさい)

4 万葉集卷四 田部忌寸磯子が大宰に任ぜられた時の歌四首の中の一

朝日影 にはへる山に 照る月の あかざる君を 山越に置きて (495)

5 万葉集卷六 神亀二年十月、聖武天皇が難波宮に幸した時、車持の朝臣千年の作った歌の反歌

白浪の 千重に 来寄する 住吉の 岸の黄土^{ハニツ}に にはひて行かな (932)

(衣を染めて行こう)

6 万葉集卷の第六 天平六年春三、難波宮に、聖武天皇が幸したもうた時の歌六首の中の一、安倍朝臣豊継作の歌

馬のあゆみ おさへ駐めよ 住吉の岸の黄土^{ハニツ}に にはひて行かな (1002)

7 万葉集卷の第七

白たへに にはふ信土^{マツチ}の 山川に わが馬なづむ 家恋ふらし (1192)

8 万葉集卷の第七

黒牛の海 丹ほふ ももしきの 大宮人し あさりすらしも (1218)

(黒牛の海は 和歌山県海草群黒江町の海、宮女の赤い裳が海に映ずる)

9 万葉集卷の第七

譬喩歌

紅に 衣染めまく 欲しけども 著^{シム}くにははばや 人の知るべき (1297)

10 万葉集卷第八

櫻の花の歌一首 若宮年魚麿作

乙女らの かざしのために みやび男の かづらのためと 敷きませる 国のはたてに 咲きにける 櫻の花の にはひもあなに (1429)

(櫻の花の、色の映えは、何と美しい事よ)

11 万葉集卷第八

仏前唱歌一首

時雨の雨 間無くな降りそ 紅に にはへる山の ちらまく惜しも (紅色に映じている)

12 万葉集卷八

笠朝臣金村が近江国伊香郡木之本町伊香山で作った歌

草枕 旅行く人も 行き触らば にはひぬべくも 咲ける萩かも (1532)

(色がつきそうになる程さき満ちた)

13 万葉集卷八

古 代 の 美 に つ い て

橘朝臣奈良麿の旧宅の宴で、^{ミデシロノヒトナ}三手代人名の作った歌

奈良山を にはほはす黄葉 手折り来て 今夜かざしつ 散らば散るとも (1588)

(美しく染めている)

14 万葉集巻第八

大伴宿弥家持の坂上大嬢に贈る歌一首……… ^{ココモ}此思へば ^{ソコユヅ}胸こそ痛き ^{ココロ}其故に 情和ぐやと
高圓の 山にも野にも うち行きて 遊びあるけど 花のみ ^(丹 穂 日 手)にほひてあれば 見るごとに ま
して思ほゆ いかにして 忘れむものぞ 恋といふものを (1629)

(花ばかり美しく咲いているので)

15 万葉集巻第九 柿本人麿歌集鷺坂にて作れる歌

^{ククヒト}細領巾の ^ヒ鷺坂山の 白つつじ われににほはね 妹に示さむ (1694)

(私の衣にそまりなさいな)

16 万葉集巻第九

挽歌

柿本朝臣人麿歌集の歌の中 紀伊国作歌四首の中の一

玉津島 磯の浦廻の ^{ウツミ}真砂にも にはほひて 行かな 妹が触れけむ (1799)

(玉津島は和歌浦、真砂に着物を染めて行こう。この真砂には懐しい妹が触れたであろうから)

17 万葉集巻第九

榛を詠む

思ふ子が 衣摺らむに にはほこそ 島の榛原 秋たたずとも (1965)

(よく色がついてくれ)

18 万葉集巻第十

秋の雑歌 花を詠む

秋田刈る かりほの宿の ^(丹 穂 経)にはふまで 咲ける秋萩 見れど飽かぬかも (2100)

(色にはえる ニは赤土 ホは表に表れたもの 山のホ 稲のホなど)

19 万葉集巻第十

秋雑歌 花を詠む

ことさらに 衣は摺らじ 女郎花 咲く野の萩に ^(丹 穂 日 面)にはほひて居らむ (2107)

(野の萩の中で美しい色に照されて居よう)

20 万葉集巻第十

秋雑歌 花を詠む

手に取れば 袖さへにほふ ^(丹 穂)女郎花 この白露に 散らまく惜しも (2115)

(袖まで色づく)

21 万葉集巻第十 柿本朝臣人麿之歌集中黄葉を詠める

妻ごもる 矢野の神山 露霜に にはほそめたり 散らまく惜しも (2178)

(色づきはじめた)

22 万葉集巻第十

秋雑歌 黄葉を詠める

妹が袖 巻来の山の 朝露に にはほ黄葉の 散らまく惜しも (2187)

(色づいている)

23 22と同じ

黄葉の にほひは繁し 然れども 妻梨の木を 手折りかざさむ (2188)

(黄葉の色の美しいのはいっぱい繁っているが、私はあまり美しくない梨の木の黄葉を折ってかざしにしよう。)

24 同じ 友に寄す

秋つ葉に にほへる衣 われは着じ 君に^{ソツ}奉らば 夜も着るがね (2304)

(がねは料、秋の木の葉の様に美しい夜を)

25 万葉集卷第十一

物に寄せて思を陳ぶ

山吹の にほへる妹が 朱華色の ^{ハネズ}赤裳の姿 夢に見えつつ (2786)

(山吹の様に美しい妹のハネズ色の赤裳の姿が夢に見えて)

26 同 譬喩

紅の ^{コゾメ}濃染の衣を 下に着ば 人の見らくに にほひ出でむかも (2828)

(色が衣にすけてほのかに見えるだろうか)

27 万葉集卷第十三 雑歌

……………三諸の山は 春されば 春霞立ち 秋行けば 紅に^(丹 穂 経)ほふ (3227) (秋になると紅葉が美しい)

28 同 柿本朝臣人麿の集の歌

……………つつじ花 にほえ少女 櫻花 栄え少女 (3309)

(ニホエのニホは丹穂で、赤い色が衣に現れる意、ニホへの語幹と同じ、エは聞コエ、栄エ、燃エ、崩エ、生エ、肥エのエと同じ、自然にそうなる意、つつじの花の様に美しい少女よ)

29 万葉集卷第十四 相聞

筑紫なる にほふ兄ゆゑに 陸奥の かとり少女の 結ひし紐解く (3427)

(美しい子の為に)

30 万葉集卷第十五

天平八年遣新羅使人等の歌の中、七夕に天漢を仰ぎ観て、各所思を陳べて作る歌三首の中 大使の歌

秋萩に にほへる わが裳 濡れぬとも 君が御船の 綱し取りてば (3656)

(秋萩に色美しくそまってはえている私の裳はたとえ濡れようとも、天の海を渡って御出の君の綱をとる事ができればうれしい。)

31 同 引津の亭に船泊てて、作る歌七首の中一

秋の野を にほはす萩は 咲けれども 見るしるし無し 旅にしあれば (3677)

32 同 竹敷の浦に船泊てし時に、各々心緒を陳べて作る歌十八首の中対馬の娘名は玉槻の歌 (色を美しくする、色を映えさせる)

^{モミヅバ}黄葉の 散らふ山辺ゆ 漕く船の にほひにめでて 出でて来にけり (3704)

(山のあたりを舟の美しさに心引かれて私は出てきました)

33 万葉集卷第十六

竹取翁が九人の仙女に会い作った歌

……………袖つけ衣 着しわれを にほひよる 子らが^(丹 因)同年輩には ……………住吉の 遠里小野の ま榛もち にほしし衣に 高麗錦 紐にぬひつけ (3791)

古 代 の 美 に つ い て

(美しくよりあつまる……はりでそめた衣に……)

34 同 娘子らの和ふる歌

住吉の 岸野の榛に にほふれど にほはぬ吾や にほいて居らむ (3801)

(私は榛にはそめてもそまらぬが、翁にはより従う事だろうか、そまっていよう。)

35 同

春の野の 下草なびき われもより にほい依りなむ 友のまにまに

(私も翁に依り従って居りませう)

(3802)

36 同 豊後国の白水郎の歌一首

紅に しみてし衣 雨降りて にほひはすとも 移ろはめやも (3877)

(たとえ雨にあって、色がうき出て美しくなる事はあっても、色があせる事がありませうか)

37 万葉集卷第十七 三香原新都を讃むる歌

山背の 久邇の都は 春されば 花咲きををり 秋されば 黄葉にほひ 帯ばせる 泉の川の
……3907 (春になると、花さき草木の芽がのび、秋になると、黄葉が色美しく映え……)

38 万葉集卷第十七

大伴家持が、天平十六年四月五日に、独り平城の旧き宅に居て作る歌六首の中の一

橘の にほへる香かも ほととぎす なく夜の雨に 移ろひぬらむ (3916)

(ニホフは赤い色がはっきりあらはれる事それが香に転用されたのは、この歌の例が古い方に属する)

39 同

橘の にほへる園に ほととぎす 鳴くと人告ぐ 網ささましを (3918)

(橘の花の香のかおる庭園にホトトギスが)

40 同

鶉鳴き 古しと人は 思へれど 花橘の にほふこの屋戸 (3920)

(花橘の薫この小庭だ、やどは屋の外)

41 同 大伴家持が長逝せる弟を哀傷しづる歌一首 (天平十八年九月二十五日)

……はだ薄 穂に出る秋の 萩の花 にほへる屋外を (言うところは、この人、人となり花
草花樹を愛でて多く寝殿の庭に樹う、かれ花薫^(花薫庭)へる庭と謂へり) ……

(萩の花が咲きにおう屋戸を) (3957)

更に万葉集卷第十七の3969, 3978, 3985, 4021, 万葉集卷第十八の4111, 4114, 万葉集卷第十九の4139, 4154, 4156, 4157, 4160, 4169ににほふが出ている。

以上かつこの内は日本古典文学体系の解釈であるが、私は必ずしも賛成できない。

万葉集卷第十三 相聞のはじめに しき島の 大和の国に 人多に 満ちてあれども 藤波の
思ひまつはり 若草の 思ひつきにし 君が目^めに こひや明さむ 長きこの夜を

反歌

大和の国に 人二人ありとしきかば 何かなげかむの二首がある。

こいしい人と同じ様な人はまたとないという思いがよまれていて心に迫るものがある。

にほふと言う言葉は見た目に美しいという意味をもっていたが、これは似ると一グループの意味である。

には元来土のことである。

古事記歌謡に見られる枕言葉の青によし、やほによし、初土^{ハツツ}は肌赤らみ底土^{ソコツ}はに黒き故 (応神

天皇御歌)などの土である。

庭＝にはも古事記歌謡に見られる。にはつどり、にはすずめ、やにはなどがある。これは家の中の、板敷ではなく、土間の所を言ったのである。

逃ぐは土煙をあげて逃げる事であろう。

西風をにしと言う、しはいせ、やませのせで風の事であり、には土であって、春さき九州あたりの北風が北方砂漠の黄砂を帯びて吹きつづくのを最初いい、やがて冬の強く寒い北風或は西風をさす様になったのであろう。私はこの四月九州を旅したがかかる北風の為、遠い野山は黄色いかすみがかかった様であった。

しかしにしが冬の北風、西風をさす様になると、強く人にせまって止まないものをにしとよび又風の意のしを除いてにとよぶ様になった。以下は記紀歌謡には無く万葉集になって出てくる言葉である。

似る、似すは、にせ即ち西風のふく様なのを言ったのである。母やこひ人に似た会うと、心が動かされ、心にせまってやまぬからである。

にほふは、うるふ(湿)がうるほふとなる様に、にがにほふになったのである。そして人やものにせまってやまぬものを言うのである。荷も肩にせまってやまぬ重みをあたえるものである。

又にくむも、心にせまってやまぬ事であって、心にくし、みにくしなどと言う言い方がある様に、悪い奴なので憎むべきだと言う丈では無い。愛憎の念、断ちがたくと言う如く、愛と憎とは分ちがたい場合があるが、このにるをとりまく一群の言葉には、その様な面がある。

されば、にほふは中古より段々と見た目に美しいと言う意味が無くなって、鼻ににほう事となり、よいと言う形容詞をつけぬと悪臭の事になってしまった。

さればにほふと言うのは強烈な印象を与えるもので、ととのっていて美しいものでなくてもよいのである。

これにかかわりがあるのは、しこ(醜)という言葉である。しこの御楯にいでたつ我はのしこは、しこには醜いと言う意味があって、しこめ、よもつしこめなどの用例があるが、ここでは強いと言う意味である。(しこめ等は書紀では醜女、古事記では予母都志許賣になっている。)しこくさというのもみにくい雑草であるが、又強い草でもある。天平宝字元年七月二日、それは橘奈良麿がクーデターを企てた当日であったが、密告者があって発覚した。その日の宣命に、そのクーデターをかかえる醜事とよんでいる。此はしこる、しこりのしこで、こりあつまる事で、強い事にもなるのである。

醜事である事が又強い事である。つよい事がみにくい事である。

強くせまるのは、にほひ、美しいと考えられる丈では無い、醜と受けとられる事もある。

醜をみにくいとよめば、にるのグループの言葉になってしまう。

かかる美はうるはしの美と又別のものである。

うるはしは愛であって、完全でまざりけのない美である。にほふは他に迫ってやまないもののもつ美である。

その様な二つの美があるのではなくて、美のとらえ方、美のあじわい方である。

その愛にもとづく美、うるはしは、やがて又みにくいものにも美がある事、かえってその様なものの中に強い美がある事をしって行っただが、しかしそれは本質的には同じものをとらえているのである。

強くせまるものにほふの方は、全く別の美であって、時にはみにくいから美なのである。きた

ないから美なのである。不完全なから美なのである。それはきたないものにもどこか美しい所があるという様なものでは無い。

かかる美は我国の美術史の上では、時々姿を現わすが、それ程には国民に受け入れられずに消えて行っていた。にほふという言葉も、記紀歌謡には全く姿を見せず、万葉に何十回と使われ、中古に入ると又あまり使われなくなり以後全く使われなくなった。

にほふのかかる意味は上述用例にあてはまり、うまく解釈できると思うが一々記さない。

かかる美の観念がよくあてはまるものは、近代のプロレタリア文学、同絵画に見うる。先年上野の西洋美術館で、ソ連の美術展があった。此は近代美術館でのアメリカ展と同時に開かれ相きそっていた。アメリカのは抽象画であったが、在来のアメリカ風感覚のものもあったが、それとはかなり異質的な日本風なもの数が多かった。ソ連のは過去のソ連及びソ連国内にあるフランス等の絵画であったが、ソ連人の絵画は一言にして言えば泥くさをまぬがれなかった。しかしその解説には、絵の書かれた時間を考慮に入れたり、かなり美術への理解が出かかっているかに思えた。日本人を描いたものも二、三点出て居り、又各民族を描いたのを一、二点ずつ出している何か政策的なものを考えさせた。それらの絵画の中、革命後のソ連のものは二つ丈であった。それは労働者の女の絵と、きたない都市を描いた絵画である。どちらもうるはしいといったものではなく、見にくいとしか言えぬものであった。ただソ連的のといってよいきたない女やきたない町を、きたなさをそのまま出して描いているのは何か印象的であった。それを美と言えば、それは恐らく「にほふ」美であろう。

日本でも似た絵画が描かれていたに異ないが、私は見ていない。(にほふは種類が多い)

戦後の事をいうと、抽象画、更にそれよりも奔放な美術、金属片をバラバラと画面にくっつけたりする表現に、よく見うけられる様になった。それは長く我々国に見られなかったものである。

両大戦の間のプロレタリア文学、美術もその様なものである。あく事のないくしみの言葉と行動をどぎつく描いたものであって、日本文学、美術の主流をなしたやり方では全く理解出来ない。

戦後の文学、美術では、かつてのプロレタリア文学、美術はいくらか変質した。探偵小説によいものが出てきた点にも特色がある。その中でも三浦綾子の永点、積木の箱などは、「にほふ」の色彩がつよい。

天平時代と現代とは、似ている点は外国文化が多量に流入した事、それを割合にそのまま受け入れる風があった事である。

両大戦の間の事を言えば、それは左翼に特に出ていたのである。

おそらく異種の美感覚が入ってきたのである。

天平のは、国民化の時代に消えて行ったのである。

にほふ、にす、にせるとは所詮偽者、偽物を作る事であって、にほふ美は唯一つしかない真実を求める愛の美に及ばず、ややすると姿を消したのである。

うるはし、うつくしとにほふの使い分けに、上代人の美についての考え方が出ていたのであるが、美について正しく把握していたと言うべきである。

強い者はにせ者であり、愛するものは真実である。強いものも美であるし、愛も美であるが、日本人は愛の方に永続的な美を感じてきた。

日本に世界的美の伝統が育ったのはその為であろう。

今後心せねばならぬ事である。